

神武東征の謎を解く

日本古代史ネットワーク・解明委員会 2021. 8. 28

飯田 眞理

【はじめに】記紀は伝承を元にしながらも、中国などの様々な文献や民間伝承が取り入れられ付加されている。さらに真実を隠した創作も存在する。しかしながら筆者は、高天原は北部九州のことであり、その勢力が出雲を屈服させた後にヤマトへ東遷して、列島の倭人の国々を連合させたことであると推測している。古事記などの記述を考察しながら、筆者の説を述べる。

第一章 ニニギ尊の降臨について検証する

記紀において、神武東征の前にニニギ命の降臨と日向神話が記されている、およそ以下の記事が順に記されている。(古事記による。一部省略)

- i) 天照大御神の孫であるニニギ命への降臨命令
- ii) 天の八衢でのサルタヒコの登場・三種の神器を授けて五柱と共に降臨
- iii) 筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣に降臨する
- iv) 笠沙御崎で木花佐久夜毘売と出会い・石長比売と天皇の寿命の説話
- v) 火中出産による三貴公子（火照命・火須勢理命・火遠理命）の誕生
- vi) 海幸山幸説話

(1) 「筑紫の日向の高千穂」と「笠沙の御前」について

ニニギ命は天の石位を離れて、天の八重多那雲を押し分けて、天浮橋から浮島に降り立ち、**筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣に降臨した。**

(日本書紀本文：日向の襲高千穂峯に降り立った。

一書第一：筑紫の日向のくしふるの峯

一書第二：日向のくしひの高千穂の峯

一書第六：降りる処を日向の襲の高千穂の**添山**

①「筑紫の日向」は南九州なのか？

★「筑紫の日向」とは南九州のことを想定していることは明らかなが、日向国が成立したのは7世紀中期以降である。日向という降臨の地名が古くから伝承されていたなら、日向とは、九州の宮崎の日向ではなく、太陽が向かうという程度の意味であったとも考えられる。

★**高千穂**についても稲が高く育ち稔るさまを表すだけで、特定の地名ではないとも考えられる。さらに、**久士布流多氣(クシフルタケ)**は明らかに金官伽耶の首露王が降り立たとされる亀旨(クジ) 峯からの借用である。大分県にはこの「亀旨峰(クシフル)」が訛ったと思われる「九重山系」と「久住山」がある。添山の**添**(ソフリ)も韓国語のソウル(みやこ)からの借用である。

②木花佐久夜毘売と出会った笠沙の御前

(筑紫の日向の高千穂に降臨した後、天宇受売命と猿田毘古大神などの詳細な説話の後に、ニニギ命は、笠沙御崎で木花佐久夜毘売と出会う)

*ニニギは言った「この土地…日本は、韓国に対峙して、笠沙の御前にまっすぐに通じ、朝日がしっかりと注ぐ国で、夕日が照らす国である。ここはとても良い土地だ」ニニギ命は底津石根に太い柱を立て、空にそびえるほどに壮大な宮殿を建てて住んだ。

*天津日高日子番能邇邇芸命は笠沙御崎（日本書紀：吾田の長屋の笠狭の岬）で美しい少女に出会った。少女は「大山津見神の娘の神阿多都比売（カムアタツヒメ）、別名を木花佐久夜毘売（コノハナサクヤヒメ）といいます。」と答えた。

★笠沙は現在の薩摩半島の南さつま市あたりを指すと考えられている。しかし旧笠沙村の誕生は大正11年（1922年）で、それ以前は片浦村と

呼ばれていて、この一帯に「笠沙」という地名は、字名としても存在しなかった。

記紀では、ニニギ命が笠沙の御前で大山津見神の娘の神阿多都姫（木花開耶姫）と出会う。そしてこの姫と結婚して海幸彦・山幸彦など三人の貴公子が誕生したことになる。

問題は「笠沙の御前にまっすぐに通じ朝日がしっかりと注ぐ国で、夕日が照らす国である。ここはとても良い土地だ」との記述である、



★上田正昭氏は、「高千穂が宮崎県で、笠沙の御崎が鹿児島県薩摩半島なら韓国に向かう地域とはなり得ないので、本来の高千穂峰の原伝承は、韓国に向かう北九州の地域であったとみるべきではないか」と主張する（『日本の神話を考える』上田正昭・小学館・1991）。

筆者も、①項において、日向、高千穂、は特定の地のことではなかった可能性を述べた。その説の根拠として、糸島市には日向峠が、室見川の支流に日向川がある。朝日をさえぎる山がなく朝日の直刺す國に合致する。その糸島市には「高祖山」があり、その南に「くしふる山」とよばれる峯がある。さらに「笠掛」の地名もある。「高千穂の久士布流多気」とは「高祖山」系の峯、笠沙は、「笠掛」のこととの説が浮上する。よって、日向・高千穂と同様に笠沙の御前も、原伝承は玄界灘沿岸であった可能性は高い。

★では、なぜ玄界灘沿岸から南九州に改変されたのか。その理由は、記紀の編纂のとき、隼人の服属の物語を記紀に挿入したことによると考えられる。その際、古事記では、「此地は韓国に向ひ、・・・」との記事が残ってしまったと推測する。

（※ただし、このニニギ命の降臨の地や神武東征の出発地についてのより詳しい考察は、神武東征と饒速日命の東遷とを比較検証した後で、第3章で述べることにする。）

(2) 神阿多都比売 (別名木花佐久夜毘売) と 山幸彦 (別名天津日高日子穗穗手見命)

★ニニギ命の妻の神阿多都比売 (別名木花佐久夜毘売) は大山津見神の娘である。同じ大山津見神の娘に出雲のスサノオの正妻のクシナダヒメがいる。さらにスサノオの子の八島士奴美神の妻のコノハナチルヒメも大山津見神の娘である。出雲王朝の始祖の妻も天皇家の最初の妻も「オオヤマヅミの娘」になっているのは何を意味しているか不明であるが、この後に石長比売の物語により天皇の命が短くなったとする説話が記されている。コノハナサクヤヒメとは、その説話に合わせるための「**繁栄と短命**」の意味を持たせるものであるとの説がある。天皇の命が短くなったとの説話 (バナナ型神話) を記しておく。

大山津見神は、木花佐久夜毘売に姉の石長比売を添え、百取の机代の物を持たせて差し出した。姉の石長比売はひどく醜かったので、ニニギ命はその姿を見て恐れて、送り返してしまった。それで妹の木花佐久夜毘売だけを残して一晩の契りを結んだ。大山津見神は「わたしが娘を二人並べて送ったのは、石長比売が仕えれば天津神の皇子 (ニニギの命) は 雪が降り風が吹いても、岩のように永遠に固く動かず変わらないものになるでしょう。木花佐久夜毘売が仕えれば 木の花が咲くように繁栄するでしょう。」と誓約をした。しかしこのように石長比売 (イワナガヒメ) を送り返し 木花佐久夜毘売を留めたことで 天津神の皇子 (ニニギ) の寿命は 木の花のように儚いものとなるでしょう」と語った。これ以降、天皇の寿命は長くは無くなってしまった。

★木花佐久夜毘売とは別名であり、本名は神阿多都比売であり、阿多隼人の姫という意味である。この後に記される海幸山幸神話におけるホオリ命 (山幸彦) にも別名がある。天津日高日子穗穗手見命と記す。古事記において別名が記されている人物がそれなりに存在する。別名が元の名であったことがほぼ定説になっている。ということは、ニニギ妃の元の名は (大山津見神の娘の) 木花佐久夜毘売であったが、隼人と結びつけるため、阿多隼人の姫が付加されてそれが本名となり、元の木花佐久夜毘売が別名として記されたと、推測する。

★ニニギ命とその後継者についても、天津日子番能邇邇芸命から天津日高日子穗穗手見命という系譜を、火中出産と海幸山幸説話に結びつけて、隼人族の皇孫への屈服の物語として作り上げたと考えられる。山幸 (ホオリ命) を皇孫としたが、天津日高日子穗穗手見命が元の名として記されたのであろう。

★以上検証したように、火中出産説話や海幸山幸説話などの隼人族につながる説話が皇孫系譜に挿入されることにより、降臨の地やニニギの妃の出身地が玄界灘沿岸から南九州に改変されたのである。奈良時代において、隼人は東北地方の蝦夷とは異なり兵部省の被官、隼人司に属し王権の重要な役職についている。その隼人を懐柔して服従させるために、隼人が天皇家と血縁があり服属したとの物語を記紀に挿入したと考えられる。

★特筆すべきことに、日子穗穗手見は、神武天皇の別名でもあるのである。海幸山幸説話は到底真実とは思われないので、ホオリ命 (山幸彦) の子とされる天津日高日子波限建鵜草葺不合命は実在しない。よって、神武天皇はニニギ命の子の日子穗穗手見であったと考えられる。

(3) 隼人とヤマト王権との関係

以上述べたことには一抹の疑問が残る。それは、隼人族の皇孫への屈服の物語が、なぜ、ニニギの降臨や神武東征の前に挿入されたのかということである。記紀の他の時代、たとえば欠史八代の天皇や景行天皇・ヤマトタケル、神功皇后物語に挿入してもよかったのではないか。筆者はその理由としては、実際に隼人族が神武東征に関係していたからと推測する。

【根拠①】 神武の一行が熊野から大和に入ったとき、吉野川の河尻での出会いの記事がある。

「八咫鳥の後より幸行せば、吉野河の河尻に到りましし時、筥を作りて魚を取る人あり。ここに天つ神の御子、「汝は誰ぞ」と問ひたまへば、「僕は国つ神、名は贄持之子と謂ふ」と答へ白しき。こは阿陀の鵜養の祖なり。」（日本書紀にも「梁を作つて魚を取る者有り、天皇これを問ふ。対へて曰く、臣はこれ苞苴擔の子と、此れ即ち阿太の養鵜部の始祖なり」と

★元龍谷大学の平林章仁氏によればこの「贄持之子（阿陀の鵜養の祖）」は阿多隼人であるとのことである。神武東征以前に南九州から住み着いていたとは限らないが、古い時代に隼人が住んでいたことは間違いない。

★奈良県五條市原町に式内社の阿陀比賣神社がある。『新撰姓氏録』大和国宇智郡に見える「阿陀郷」とは当地一帯と推定される。南九州の「阿多隼人」と呼ばれたが当地に移住し、彼らの信仰する神を祀ったのが当社だと考えられている。（インターネット：「神社遊録」より抜粋）

★『和名抄』の大和国宇智郡阿陀郷の名が見える。阿多隼人の居住地であり、南方漁法の鵜飼が行われていた地域である。薩摩から移住の者が地名、魚法、祭神を持ち込んだものと見て差し支えはなさそうだ。「日本の地名」（谷川健一著）には 鵜のことを沖縄では「アタック」と呼んでいたとの紹介が記載されている。（インターネット：「神奈備によろこそ！」より抜粋）

（豊玉毘売は鵜の羽で産屋を作ったことで、生まれた子の名を鵜葦草葦不合命という説話からも、南九州で鵜飼が行われていたことになる。）

【根拠②】 ニニギ命の子であるホデリ命（海幸彦）を隼人阿多君の祖神とするために、その母を阿多の姫（神阿多都比売として創作したことは理解できる。しかし、ニニギ命の孫（筆者は子と考える）の神武も、東征以前に日向吾田邑の吾平津媛を妃にしている。隼人族の皇孫への屈服の物語は既に完了しているのである。神武の妻が阿多の姫であることを創作する必要はない。筆者は神武＝崇神説をとるが（解説は後に述べる。）、その崇神紀において、武埴安の乱が記されている。孝元天皇が河内の青玉の女である波邇夜須毘売を娶って生んだのが武埴安彦である。武埴安彦の妻は阿多姫で隼人族である。母の河内青玉繫の娘というのも隼人族の人という説が有力である。

以上の二つの根拠より、隼人族はヤマト王権が成立したときから王権に深く関係していた可能性は極めて高い。

【根拠③】

三番目の根拠としては、ニニギ命の降臨と神武東征に登場する大伴氏と久米氏の祖は、隼人と関係が深いことである。大伴氏と久米氏の祖は、

神武東征において隼人族を率いていた可能性がある。これについて詳しく述べることにする。

《大伴氏と久米氏の原郷は熊本で狗奴国の末裔か？》

★古事記では次のように記す。「(ニニギ命が降臨した後) 天忍日命と天津久米命の二人は、天の石鞆を負い、頭椎の大刀を身につけ、天の波士弓を持ち、天の真鹿兎矢を手に持ち、ニニギ命の前に立って仕えた。天忍日命は大伴連などの祖神、天津久米命此は久米直の祖神である。」

(古語拾遺(忌部氏の書)でも同様の記述がある。) 大伴氏と久米氏は軍事を担当してニニギ命に仕えたことになる。神武東征においても、大伴氏の祖の道臣命と久米氏の祖である大久米命が軍事を担当している。

★久米氏の発祥地として有力な説として、熊本県人吉地方(熊本県球磨郡多良木町久米)がある。和名抄に肥後国球磨郡久米郷がある。戦前の学者である喜田貞吉は「久米は玖磨にして、久米部は玖磨人、即ち肥人ならん。」と述べている。

★一方の大伴氏についてはどうであろうか。

万葉集の大伴家持の歌には「大伴の遠つ神祖の其名をば大来目主とおひもちて」とあり、素直に採れば大伴氏と久米氏は同族、または大伴氏が久米部を統率している姿に重なる。

久米氏の発祥地が熊本なら、久米氏と同族または統率していた大伴氏も発祥は熊本になる。

日本書紀には、神武に同行した大伴氏の祖のはじめの名を**日臣命**と記す。(先導をつとめたので、道臣という名をもらう) ひょっとしたら、この日臣命や天忍日命の「日」は「**肥**」だったかもしれない。

★筆者は大伴氏と久米氏は魏志倭人伝に記す**狗奴国の末裔**と考えていた。ところがすでに太田亮がその説を述べていたのである。

『久米の項』に、クメ また来目に作り、久味ともあり。なほクマとも通ずるが如し・・・此等によれば、久米は、クマ、クミ、クメと通ずる語にして、喜田博士が、『久米は玖磨にして、久米部は玖磨人、即ち肥人ならん』と云はれし説に同意せざるを得ず。即ち久米部は南九州の大種族・肥人にして、**魏志東夷傳に、狗奴國とあるが、此の久米部の本據ならんと考へらる**」と記す、

(太田亮『姓氏家系大辭典』昭和38年11月初版(昭和54年八版))

★(サルタヒコとアメノウズメの説話をはさんで) 大伴氏と久米氏の祖は、ニニギ命と阿多隼人の姫との出会いの直前に登場する。大伴氏と久米氏の祖が、隼人神話が挿入されたことと関係があることを匂わす。大伴氏と久米氏が狗奴国の末裔かどうか別にしても、原郷が熊本なら、隼人の地と接する地域なので大伴氏と隼人が関係していた可能性はきわめて高い。そのことは奈良時代の隼人の叛乱からもわかる。「**大伴旅人は養老4年(720年)、隼人の叛乱の報告を受け、征隼人持節大將軍に任命され反乱の鎮圧にあたる。**」これは大伴氏の原郷が隼人と関係深い熊本だったからである。叛乱者のなかには大伴氏と関係する人々も存在して鎮圧しやすかったからで

あろう。継体天皇のときの磐井の乱を鎮圧した物部（龜鹿火）が北部九州の出身であったのと同様である。よって、大伴氏が狗奴国の末裔でなかったにしても、大伴氏も久米氏と同様に隼人の近接の熊本発祥の氏族だったことほぼ間違いないと考える。

《この節の要点》

★ニニギ命の降臨から神武東征とヤマト王権成立までの全般にわたり、隼人の影が見強くみられる。海幸山幸説話における隼人族の皇孫への服従の物語が創作であったにしても、隼人が神武東征前後に関係していたことを強く示唆する。

第二章 神武東征を検証する

それでは、これから古事記の記述を元にして、神武東征の物語について検証していくことにする。

天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命は、その叔母（母親の妹）の玉依毘売命（タマヨリヒメ命）を娶って、産んだ皇子の名前は五瀬命 次に稲氷命、次に御毛沼命、次に若御毛沼命、別名を豊御毛沼命別名を神倭伊波礼毘古命である。御毛沼命は海を越えて常世の国へ渡った。稲氷命は母の国である海原に行った。

（日本書紀・即位前紀：神日本磐余彦天皇…諱は彦火火出見、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊（ヒコナギサタケウガヤフキアエズノミコト）の第四子である。神代第十一段の第三の一書では第三子とし、第四の一書は第二子とする）

★この四兄弟のうち、**稲氷命**と**御毛沼命**の二柱は常世の国と海原に行ってしまった。（日本書紀では神武東征の途中で海原と常世の国へ去る。長男の**五瀬命**は、白肩津で登美的那賀須泥毘古との戦いで矢傷を受け、紀国の男之水門で死ぬ。そのなかで**若御毛沼命**（神武天皇）だけが別名の「カムヤマトイワレビコ」が記される。前章で示したように、日本書紀では神武のみが「彦火火出見」という皇孫を示す別名も持っている。

★**稲氷命**と**御毛沼命**は説話の人物であり、創作であることは間違いない。では**五瀬命**はどうか。筆者はこれまでは、五瀬命が東征のリーダーであり、矢傷を受けて紀国で死んだのは史実であると考えていた。しかし、矢傷を受けただけで死んでしまうのは不可解であると思うようになった。紀の国以降の物語においては、五瀬命は存在せず、神武が当初からリーダーだったような描き方になっている、さらに、もし五瀬命が本来のリーダーであったなら、神武と同様に妃や子のことが存在したはずだが、東征が完了し神武の即位と論功行賞まで五瀬命関係者は全く記されておらず、五瀬命が存在しなかったような記され方である。「日の御子であるのに日に向かって戦ったので敗北した。」ことの象徴として。五瀬命の死を創作挿したと推測する。東征のリーダーは最初から彦火火出見（神武）であった、と考えられる。

★ただ、戦いのあったとする白肩津は東大阪市の日下（くさか）の近くである。東大阪市と生駒市をつなぐ暗がり峠がある。そこからは大阪平野を一望できる。

②その後、力を回復した東征軍は熊野から八咫鳥の道案内によりヤマトへ向かったことになっている。しかしながら、熊野からヤマトへの行程は至難のことで真実とは思われない。河内に着いたとき、ヤマトへの龍田越えが険しいので引き返しているが、それとは比較にならない険しいルートであり、行軍できるはずがない。和歌山から大和に行くには紀の川をさかのぼるほうがベストのルートである。実際古事記では、大和に入った最初の地は吉野川の河尻になっている。（日本書紀では最初に宇陀に到着している。）おそらく神武東征の原伝承は紀の川をさかのぼったことであったと考えられる。

(4)ヤマトでの戦いの創作性

宇陀での戦いからはじまって、登美毘古（那賀須泥毘古）を倒すまで、様々な敵との戦いが記されている。以下に要約する。

①宇陀での戦い

大伴連等の祖道臣命・久米直等の祖大久米命の策略により、兄宇迦斯は自分がつくった罠に逆にかかってしまい、切り殺される。・弟宇迦斯は恭順する。（宇陀の水取りの祖）

②（忍坂の大室に到着すると、尾の生えた土雲である土雲八十建が岩屋で待ちうけていたが、忍坂（宇陀の西、現在の桜井市忍坂）の大室でだまし討ちで土雲八十建を殺す。

*久米歌「忍坂の大室屋に人多に来入り居り人多に入り居りとも みつみつし久米の子が 頭椎い石椎いもち 撃ちてし止まむ みつみつ久米の子等が 頭椎い石いもち 今撃たば宜らし。かく歌ひて、刀を抜きて、一時に打ち殺しき。」

③登美毘古を撃つ

そのときの久米歌：

「みつみつし久米の子等が 粟生には臭葦一本そねが本そね芽繋ぎて 撃ちてし止まむ。」

「みつみつし久米の子等が 垣下に植ゑし椒口ひひく 吾は忘れじ撃ちてし止まむ」

「神風の伊勢の海の生石に 這ひもとほろふ細螺のい這ひもとほり 撃ちてし止まむ」

④兄師木、弟師木を撃つ

そのとき、神武軍が疲れたときの歌：

「楯並めて伊那佐の山の木の間よも い行きまもらひ戦へば 吾はや飢ぬ島つ鳥 鶺鴒養が伴 今助けに来ね」

⑤饒速日の帰順

饒速日命は「天津神の御子（＝イワレビコのこと）が天降ったと聞きました。そこで私（＝ニギハヤヒ）も天降って来ました」と言い、天津神の印である宝物をイワレビコに献上した。（日本書紀や先代旧事本紀では、饒速日命は神武東征以前にヤマトに天下ったことになっている。これについては第3章で詳しく述べる。）

《考察》

★（日本書紀では、古事記に比べてより多くの賊を討伐したことになる。）しかし、このような大殺戮によりヤマトを支配できるとは到底考えられない。生き残った在地民は、恨みと復讐心で従うはずがない。ヤマト以外の各地の首長たちもヤマト王権に反発・警戒することになる。

★神武東征は「東北蝦夷の征服」とは性格が異なる。その目的は、高天原勢力が盟主となって九州から関東・東北南部までの倭人の地域王国を連合させるためであったと考える。実際、神武東征以降のヤマト王権は、大王（天皇）による絶対支配ではない。ヤマトや各地の豪族たちによる緩やかな連合政権である。高天原勢力とは北部九州勢力であると筆者は考えているが、その高天原勢力がヤマトの現地勢力を従わせ、各地の地域王国を連合させるためには、現地勢力や地域王国にも連合のメリットがあることを示す必要があった。それは北部九州勢力が掌握している朝鮮半島の鉄資源や先進技術などを各地に流通させることであったと考えられる。それらは各地域とも絶対に欠くことができないものであり、各地の首長たちも北部九州勢力の主導に従わざるを得ないことになったと推測する。各地の交流が促進されて、倭人連合全体が発展することとなったと推察できる。

★以上のことは、前方後円墳が九州から関東・東北南部までに短期間で広まった考古学的事実によっても補強される。各地の首長たちは銅鐸祭祀を捨てて、神仙思想（前方後円墳祀り）を受け入れたということである。高天原勢力は平和的に倭人連合の盟主になったのである。

★日本書紀にはニニギ命の降臨の前に「遠い所の国では・・・村々はそれぞれ長があつて、境を設け相争っている。」と記し、当時の弥生社会を正しく表わしている。東征の主目的はヤマトの地に王権をたてて倭人の国々をまとめることだった。多少の戦いがあったことは不定出来ないが、実際は東征ではなく、東遷だったと考えられる。（実際、先代旧事本紀において、饒速日命の東遷は多くの氏族の祖と共に平和的になされたことを記している。）

★不可解なことに神武東征の物語は、ほとんどが軍事だけの物語になっている。同行したのも軍事を担当した道臣命（大伴氏の祖）と祖大久米命（久米直の祖）だけである。ニニギ命の降臨の際には、五伴緒をニニギ命にお供させているが、神武東征においてこの五伴緒は全く登場せず、八尺の勾玉・鏡と草那芸剣も記されない。

＜注：五伴緒とは、天兒屋命（中臣連の祖）・布刀玉命（忌部首の祖）・天宇受売命（猿女君の祖）・伊斯許理度売命（鏡作連の祖）・玉祖命（玉祖連の祖）でいずれもなぜか、祭祀関係の氏族の祖である。>

ではなぜ軍事物語だけになったのか、なぜ五伴緒は登場しないのか、ヤマト王権の成立には隠さなければならなかったことがあったと推察する。それは神武東征に先立って東遷した饒速日命との関係であると考えられる。このことを含めて、ヤマト王権成立について次章で詳しく考察する。

第3章 邪馬台国の東遷とヤマト王権の成立

～卑弥呼(天照大神)・饒速日命・神武をつなぐもの～

★これから述べることは、先学者の説を取り入れながら筆者の説を述べたものである。

「整合性と矛盾がないこと」を基本にして、記紀に隠された真実を推理したものである。

(1) 天照大神は奈良時代の創作とする説について

記紀には、ニニギ命の降臨に際して以下のようなことが記されている。

(出雲神話と大国主の国譲りの後) 天照大御神と高木神は太子の天忍穗耳命に地上に降りるように命ずる。ところが、天之忍穗耳命は 天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命(ニニギ命) が生まれたので、この子を地上に使わすと良いでしょう。」と語る。そこで、日子番能邇邇芸命に地上に降り立つことになる。

これについて、全て奈良時代の創作とする次のような説がある。

＊天照大神を持統天皇、素戔嗚(スサノオ)を天武天皇、天之忍穗耳命を草壁皇子、ニニギ命を文武天皇に擬して創作した。天照大神の子ではなく孫のニニギ命が降臨したことより、持統の次の天皇が子の草壁皇子ではなく孫の軽皇子(文武天皇)が即位したこと、つまり孫が後継者になることが神代の時代から正当であったことを示すためであった。

★これはあり得ないと筆者は考える。孫が即位した例は他にもある。顕宗・仁賢大王や舒明大王も孫の即位である。スサノオは悪神で天照大神の弟であり、持統の夫である天武とは全く異なる。ニニギ命の降臨は高天原から葦原中国へ降りることであり、持統の孫の文武の即位の正当化とは読み取れない。正当化するなら、即位した神武を天照大神の孫とするなど、はっきりわかるようなことにしたであろう。天照大神の孫であるニニギ命の降臨は、天照大神の時代より少し後であったことの反映であると考えの方が適切である。

★皇祖神としての天照大神は、別名として**大日靈貴神**(おおひるめのむちのかみ)と記す。これは古くからの名称であることは明らかである。古語拾遺には「上古の世に未だ文字有らざるときに、貴賤老少、口々に相伝え、前言往行、存在して忘れず」と記す。皇祖神としての**大日靈貴神**が大王一族や多くの天神氏族たちに古くから伝承されていたのは間違いない。持統天皇に擬して新たに皇祖神を創作するような恐れ多いことは、あり得ない。皇族や多くの氏族さらに持統自身も考えもつかないことであると考え。

(2) 天皇家の先祖の地(高天原)は北部九州

二つの文献からその根拠を述べる。

①一つ目は『続日本紀』の次の記載である。

【文武天皇即位の詔】「高天原にはじまり、遠い先祖の代々から、中頃及び現在に至るまで・・・」

【聖武天皇即位の詔】「高天原に神として留りおいでになる天皇の遠祖の皇孫の統治すべき国として授けられたことに・・・高天原にはじまる四方の治めるべき国を、・・・」

②二つ目は中国の史書・『新唐書』である。

「・・其王姓阿每氏、自言初主號天御中主至彦瀲凡三十二世皆以尊為號、居筑紫城、彦瀲子神武立更以天皇為號徙治大和州」

★おそらく日本の使者が日本書紀の内容を解説したものであろう。「天皇家の先祖の三十二世は筑紫＝北部九州に居住していた」と記しているのである。

※以上二つの文献からは、当時の皇族や氏族達が「天皇家は高天原（筑紫・北部九州）から大和州（奈良盆地）へ移った」との認識をはっきりと持っていたことになる。飛鳥時代やそれ以前の天皇（大王）も先祖の地を尊ぶとともに皇祖神を祀っていたはずである。奈良時代にそれらを消し去って高天原や天照大神を創作することなどあり得ないことである。さらにもし仮に天皇家の起源がヤマトであったなら、ヤマトを襲めたたえて天皇の祖先がヤマトに降臨したと記したはずである。

(3) 北部九州の弥生文化と古墳文化の連続性

考古学からも北部九州勢力の東遷を示している。北部九州の弥生文化が古墳文化に連続的に続いているからである。

①鏡を最高の宝として、劍（矛）や玉などを、**朱（硫化水銀）**と共に埋葬する文化はすでに弥生中期の北部九州で広く始まっている。吉武高木遺跡、須玖岡本遺跡さらに三雲遺跡の甕棺墓には、王墓にふさわしい副葬品が埋葬されていて、古墳時代につながるものがすでに出現している。



糸島市
井原鍵溝遺跡



筑前町、峯遺跡
甕棺墓



吉野ヶ里、甕棺墓



天理市、黒塚古墳



高槻市、つげやま
前方後円墳

②南海産であるゴホウラ貝・スイジ貝・イモ貝製の貝輪は鍬形石・巴形銅器・銅釦として形を変えながら古墳時代の列島各地の前方後円墳の副葬品として受け継がれている。



筑紫野市甕棺墓



奈良、島の山古墳

③弥生後期に北部九州で多く出土する鏡として
内行花文鏡と方格規矩鏡がある。前方後円墳時代にも
大切な宝として扱われている。方格規矩鏡に

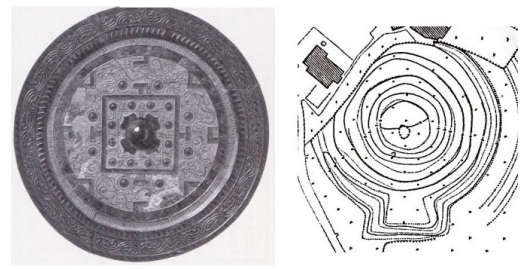
描かれている**円は天**のこと、**方は地**のことで
「不老長寿の神仙世界」を示していて、
当時の倭人たちはその神仙思想に強く傾倒
していたのであろう。筆者は方格規矩鏡の

「天＝円・地＝方」の形を墓に採用したものが後の前方後円墳で、後円部が天を、前方部が地を
表したものと推察する。

④墳墓の上での祭祀も北部九州が起源である。鳥栖市の柚比本村遺跡、吉野ヶ里遺跡、平原王墓
などでは、何らかの祭祀が行われていたことがわかっている。一方、後の列島各地の前方後円
墳において祭祀が行われていたことは自明である。つまり墓上で（祖霊）祭祀をすることも北
部九州の弥生時代から古墳時代に続いているのである。

⑤近畿地方の弥生時代は銅鐸文化圏だったが、その銅鐸は古墳時代までには捨てられたり壊され
たりしている。石野博信氏は「ヤマト王権の中心になった人々はどうも銅鐸を宝としていた元
から住んでいたものでなく、外部からやってきた人のようだ。」と語っていた。

以上①～⑤より、銅鐸祭祀を廃止させて前方後円墳時代を成立させたのは、北部九州勢力で
あったことは間違いない。もちろん、纏向遺跡から出土した多くの外来土器からは、ヤマト王権
成立には、吉備、出雲、東海などの勢力も加わったものと推察される。



【図4】 方格規矩鏡と前方後円墳

(4) 前方後円墳と前方後方墳の起源は北部九州か？

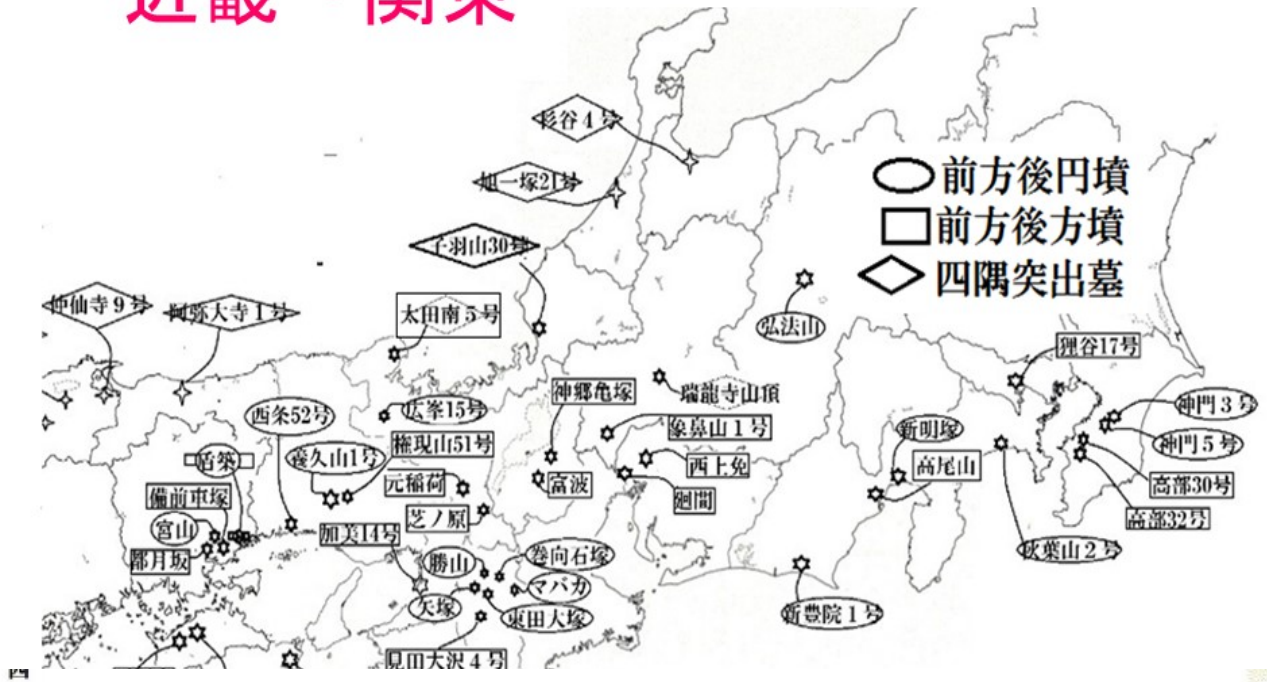
次に、前方後円墳などの古墳の起源から北部九州勢力の東遷を考察する。晋書の世祖武帝紀に
前方後円墳の起源を示唆する記述がある。「泰始二年（AD266年）十一月己卯 倭人來獻方物并
園丘・方丘於南・北郊二至之祀合於二郊」と記す。倭人が洛陽での「円丘・方丘」の祭祀をした
のであろう。そしてこの経験を持ち帰り前方後円墳を造りだしたと推察する。

そうすると前方後円墳のはじまりは早くても三世紀末になる。現在の定説では前方後円墳のは
じまりとしては纏向石塚古墳などを出現期古墳として、箸墓古墳などで定型化されたとする。し
かしそれまで墳丘墓らしいものが全くなかったこの地域に、突然と古墳群が生まれるのは不合理
である。纏向型古墳は他の地域に既にその原型があるのではないかと考えて全国の早期古墳を
調べ詳細に検討した。

①各地の発生期古墳の年代の検討

詳細な検討は省略して、検討結果の一部のみを述べる。

近畿～関東

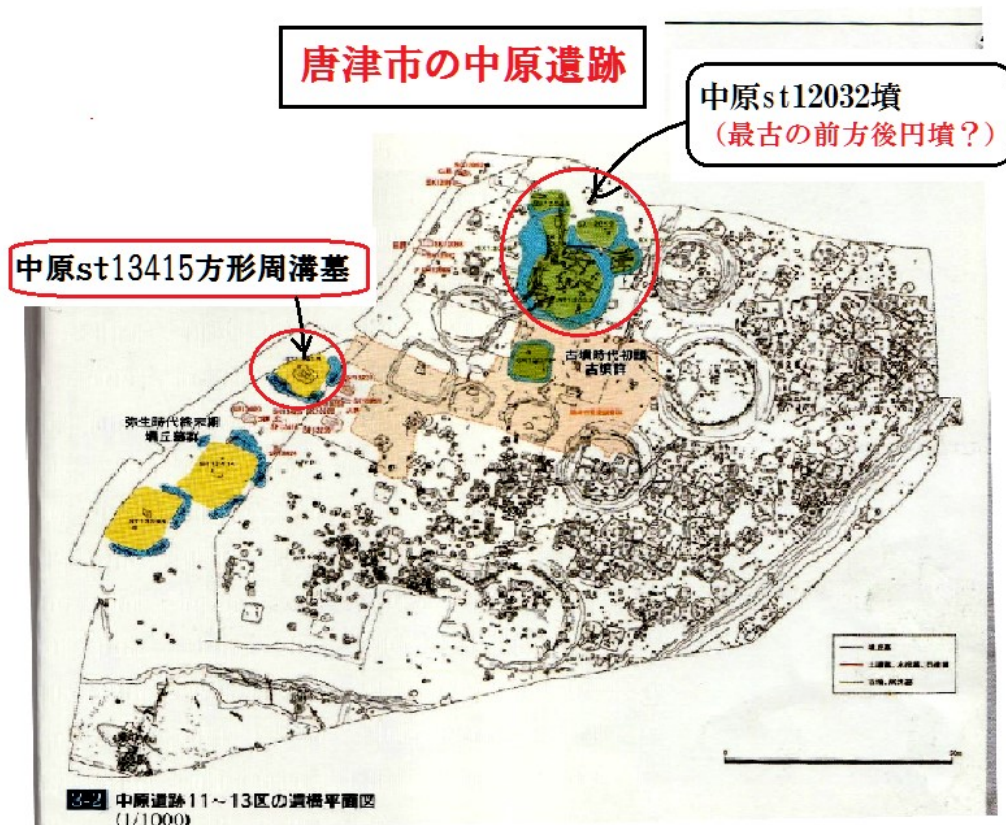


九州～中四国



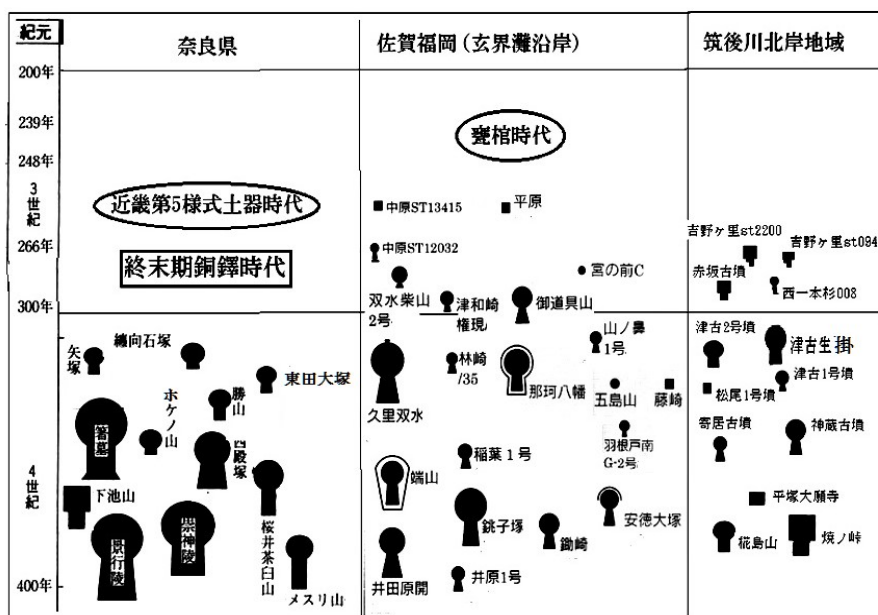
★筆者は、糸島市の平原王墓の実年代は三世半ばとの奥野正男説を支持する。（卑弥呼の墓である可能性は極めて高い。）唐津市の中原 st13145 も同時期で、これらに続くのが、御道具山古墳、津和崎権現、唐津市の中原 st12032 墳などである。

特に**中原 st12032 墳**は**中原 st13145 墳**に隣接しており、連続して造られているので三世紀半ばから少し下る時期になり、現時点では、列島の最古の前方後円墳ではないかと考えられる。



★北部九州の墓制が列島全体に広がった

早期古墳といっても年代は同じではなく、前方後円型でも前方後方型でも北部九州のほうが絶対年代は古いことがわかった。その北部九州起源の古墳が列島各地に伝わったと考えられる。



【図6】 北部九州と奈良県の前期古墳の編年比較

山陰の四隅突出墓や吉備の双方中円墳は列島に広がっていない。奈良盆地で纏向型古墳が出現する以前に、既に列島各地では早期古墳が出現していたのである。

つまり四世紀半ばにヤマト王権が奈良盆地で成立する以前に、すでに北部九州勢力が列島各地に移住していたと考えられる。（饒速日命と共に各地に東遷？）筆者による奈良県と北部九州との前期古墳の比較編年を図6に示しておく。

（5）邪馬台国は記紀に記す高天原のこと

①高天原は筑後川北岸地域

★安本美典氏は次に述べるア～ウのことより高天原は筑後川上流の夜須・朝倉地域であるとする。

（ア）高天原には山や川、畦や水田が存在し、
地上であることを示唆する。

（イ）日本書紀に記す「安川」「香山」「金山」
など高天原の地名は現在も筑前町や朝倉市に
残っている。朝倉市の甘(アマ)木のアマは、
昔は天(アマ)であった。

（ウ）高天原勢力が出雲を征服したとき、
建御雷之男神が天鳥船で出雲の伊那佐の
小浜に降りたとする伊那佐の小浜は現在の
島根県の稲佐にあたる。船で出雲の西の浜に
降りたことより、高天原は北部九州で
あることになる。図3は、筆者が現在の

「安川」「香山」「金山」の地を調べて地図に記したものである。高天原は
この地域（筑後川北岸）になる。

★解説は省略するが、筆者は、邪馬台国の所在地として、北部九州の筑後川北岸の広域
（吉野ヶ里～小郡市～筑前町・朝倉市）の説である、記紀の高天原と合致するのである。



図3 福岡県に残る高天原の地名

②天照大神は邪馬台国の女王卑弥呼の軌跡が神話化されたもの

《天照大神と卑弥呼との共通点》

- * 共に偉大な女王であり弟がいた。
- * アマテラスの岩戸隠れ＝卑弥呼の死
- * スサノオの追放＝男王では國中服さなかったので廃された。
- * アマテラスの復活＝宗女トヨを女王として立てて國中治まった。

★偶然とは思われない一致点である。偉大な女王卑弥呼の事績の伝承は記紀に記されないはずがない。卑弥呼＝天照大神なのである。白鳥庫吉、和辻哲郎はじめ、松本清張、高木彬光、黒岩重吾、栗山周一、飯島忠夫、和田清、市村其三郎、安本美典、井沢元彦、鷲崎弘朋など多くの古代史家がこの説を提唱している。筆者もこれに賛同するものである。

以上「邪馬台国北部九州説」と「高天原＝邪馬台国説」と「天照大神＝卑弥呼説」とは互いを補強し合い、全てを合理的に説明できるのである。

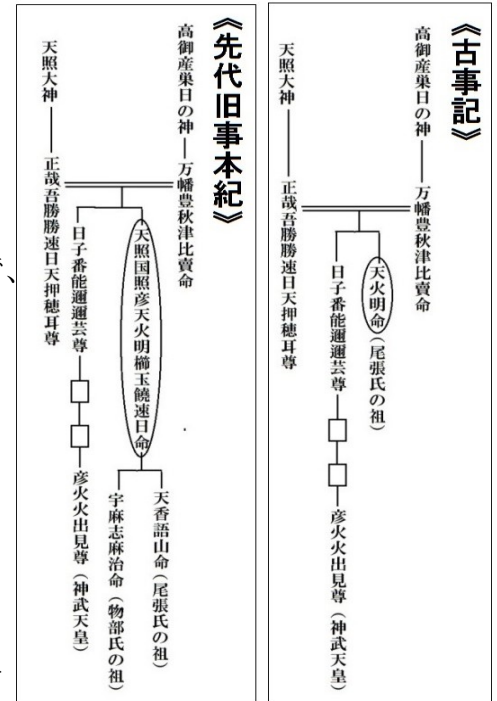
(6) 最初の東遷は饒速日命(天照大神の孫)

筆者は、記紀におけるニニギ命の降臨や神武東征の物語は、高天原勢力(邪馬台国後継勢力)が奈良盆地に東遷してヤマト王権を成立させたことの反映したものと考える。ところが、そのニニギ命の降臨や神武東征以前に、饒速日命の東遷がなされていたのである。

①ニニギ命の兄とする天火明は饒速日命のこと

★平安時代に編纂されたとされる先代旧事本紀に

において、饒速日命は天照大神の孫であって、ニニギ命の兄であり「天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊」という名で記されている。ところが、ほとんどの古代史家は、長い名なので、「饒速日」と「天火明」とは別神で、旧事紀編纂者が両神を合体させたものとする。しかし、それらは明らかに誤りである。というのは、ニニギ命も「天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命尊」という長い名である。ニギ命と饒速日命の父は「正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊」であり、「天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊」と類似した名である。「饒速日と勝速日は親子、ニギハヤヒとニニギは兄弟」とする先代旧事本紀のほうが真実を伝えていると考える。



【図7】 饒速日と天火明の系図

★物部氏は天神氏族でありながら、大伴氏、中臣氏などと異なり、神代における先祖が全く記載されていない。「天火明」＝「饒速日」で天照大神の孫であることによって、その不可解さが解消されるのである。

②《饒速日尊が奈良盆地をヤマトと名づけた》

★先代旧事本紀では饒速日の天下りについて次のように記す。

「饒速日尊は天神の御祖神の命令で天の磐船にのり河内の国の河上の哮峰に天降りした。さらに大倭の国の鳥見の白庭に遷った。天の磐船に乗り大虚空をかけめぐり、この地を天から眺め見て天降った。すなわち『虚空見つ日本の国(そらみつやまとのくに)』と言われたのは、このことであろうか。」

日本書紀の神武紀の最後にも記されている。

「大己貴神は、(奈良盆地のことを)名づけて『玉垣の内つ国』といわれた。(一方)饒速日命は天の磐船に乗って大空を飛び廻り、この国を見てお降りになったので、名づけて『空見つヤマトの国』という」



【写真3】 哮峰（生駒山山頂）よりヤマトの国を望む

★つまり、「日本書紀」も「先代旧事本紀」も饒速日命が「奈良盆地をヤマトと名付けた。」と記しているのである。おそらく日本書紀編纂のとき、左大臣まで出世した物部麻呂より提供された物部氏家伝を引用したのであろう。筆者の説である高天原＝邪馬台国、天照大神＝卑弥呼を元にとすると、天照大神（卑弥呼）の孫である饒速日命が、故郷の邪馬台国（ヤマト）の名を移して奈良盆地をヤマトと名づけたということになる。

②饒速日尊と神武との関係

以上述べてきたように、大国主の国譲りの後、最初に近畿地方へ天降ったのは天忍穗耳尊の長男である饒速日命であった。神武東征のとき、神武は饒速日尊が天降ったヤマトを目指したことが日本書紀にも記されている。「東に良い土地がある。青い山が取り巻いている。その中に飛び降りた者は饒速日というものであろう。そこに行って都をつくるに限る。」と語っている。

《筆者の推理》

★饒速日命が東遷しているにも関わらず、なぜ神武東征がなされたかについて、筆者が推理したことを述べる。先代旧事本紀卷三・天神本紀には「饒速日命は長髓彦の妹の御炊屋姫を妻として・・まだ子が生まれないうちに、饒速日命は亡くなった・・高皇産靈尊はあわれと思って速瀛の神をつかわし、饒速日尊のなきがらを天にのぼらせ・・天上で葬った。」と記す。

筆者は第一章において、神武（ヒコホホデミ）はニニギ命の曾孫ではなく、ニニギ命の子であることを述べた。記紀では、饒速日命が生存していて神武に恭順したと記しているが、饒速日命は神武の伯父にあたるので、神武がヤマトへ入ったとき饒速日命が生存していた可能性は低い。物部氏の家伝が、開祖である饒速日命が既に亡くなっていたとの悲劇をあえて記しているのである。饒速日命が神武東征の前に亡くなっていたのは真実であると考えられる。

★しかしながら、宇摩志麻治命が饒速日命の子であることは偽りであると考ええる。

先代旧事本紀は「**饒速日尊は長髓彦の妹の御炊屋姫を妻とした。御炊屋姫は妊娠した。まだ子が生まれないうちに、饒速日尊は亡くなった。**」と記す。子が生まれないうちに父親が死ぬことはありえるが、この記述は疑わしい。饒速日命の実子であれば皇孫として即位したはずである。宇摩志麻治命という名も皇孫らしくない名である。筆者は、饒速日命には東遷後の子は存在しなかったと推測する。つまり**饒速日命の皇孫後継が途絶えてしまった**と推測する。

★それゆえに、高天原勢力としては、**皇孫の傍系**であるニニギ命の子の神武（彦火火出見尊）による東遷をさせることとなったのであろう。記紀において、「天火明」と「饒速日」を別神のように記したのは、「物部氏の祖先のほうが正当な皇孫であり、天皇家は傍系であること」を隠さなければならなかったと考えられる。

③饒速日命の東遷とニニ命も天降りとの比較

先代旧事本紀・卷第三 天神本紀には、饒速日命の東遷について、極めて詳細に記されている。以下の項目のみを示す。

- ★天神の御祖神は、天孫の璽である瑞宝十種を（饒速日命）に授けた。
- ★高皇産靈尊が、三十二人に命じて、みな防御の人として天降しお仕えさせた。
- ★五部の人々が副い従って天降り、仕えた。
- ★五部の造が供領となり、天物部を率いて天降りお仕えした。
- ★天物部ら二十五部の人々が、同じく兵杖を帯びて天降り、仕えた。
- ★船長および梶をとる人たちを率いて、天降り仕えた。

①上記のなかで、防御の人三十二人のうち次の神々（人々）が重要な推理の元になる。

- * 天香語山命(尾張連の祖) * 天鈿売命(猿女君の祖) * 天太玉命(忌部首の祖)
- * 天児屋命(中臣連の祖) * 天明玉命(玉作連の祖) * 天糠戸命(鏡作連の祖)
- * 天櫛玉命(鴨県主らの祖) * 天下春命(武蔵秩父国造等の祖)
- * 天背男命(尾張中嶋海部直等の祖) * 天背男命(山背久我直等の祖)
- * 天神玉命(三嶋県主等の祖) * 天御陰命(凡河内直らの祖) * 天牟良雲命(度会神主らの祖)

など 32 人

★赤字で示した**五柱の神**は、記紀においてニニギ命が降臨する前に、天の八衢で仕えたと記される**五部緒**（5つのお伴をするもの）と同一の神々である。先代旧事本紀と記紀のどちらが真実を伝えているのであろうか。先代旧事本紀は記紀よりもかなり後の平安時代の編纂なので、物部氏を称揚するための創作であるとも考えられる。しかし藤原氏（中臣氏）は平安時代の最高権力の氏族であった。その藤原氏（中臣氏）が物部氏の配下であることを恐れることなく書いているのである。先代旧事本紀より少し前に提出された忌部氏の書物「古語拾遺」にも「(国史には) **一二の委曲、造りたるあり**」と記す。先代旧事本紀にも記紀の記述において、

異をとなえていると推察できる記述もある。よって、先代旧事本紀のほうが真実を伝えていると考えられるのである。

★この五部緒はその後、日向の高千穂に降臨したときから、神武東征によるヤマト征服まで全く登場しない。その理由は、五部緒を含む多くの氏族の祖たちは、既に神武東征以前に饒速日命と共に東遷していたからであると推測する。ついでに述べると、この五人以外には地方氏族の祖（**青字のもの**）も記されている。饒速日命と共に東遷したかどうかは別にしても、北部九州勢力がヤマト以外の地に移り住んで、その地のリーダーになったことを伝えたものと考えられる。

★神武は饒速日命の亡き後の後継者として（大伴氏と久米氏の祖だけを伴って）ヤマトに迎えられただけであった。つまり神武東征（東遷）では、同伴者はほとんど存在しなかったのであろう。よって、神武東征（東遷）は（ほとんどを創作の）軍事物語として記さざるを得なかったと推測する。ただし、大伴氏と久米氏の祖については、先代旧事本紀においては全く登場せず、記紀ではニギ命の降臨において**五部緒**とは別に記されていて、神武東征にも同行している。おそらく、大伴氏と久米氏の祖は、神武と関係深い人物で神武と共に東遷したのであろう。

《神武東征の出発地は日向なのか》

★筆者は第1章で、ニギ命の降臨の地（饒速日命の東遷の出発地でもある。）が玄界灘沿岸であったことを述べた。これを前提にしても様々な説が考えられる。

（**A 説**）神武は玄界灘沿岸で生まれ、そこから東征（東遷）した。「筑紫の岡田宮で一年滞在した」と記すのは、東征がこの地より出発したことの残影である。

（**B 説**）神武（ヒコホホデミ）は玄海灘沿岸で生まれたが、なんらかの理由で日向へ移住してから東征（東遷）した。

（**C 説**）饒速日命の東遷後、ニギ命は玄海灘沿岸から日向へ移住した。そこで神武が生まれて東征（東遷）した。

★原郷が熊本である大伴氏の祖と久米氏の祖を伴っていることや、神武の妃が阿多隼人の姫であったことから、B 説または C 説のほうが可能性は高くなる。しかし、説明はどのようにも出来るので A 説も完全に否定できない。

（6）【高天原勢力（邪馬台国後継勢力）が東遷した理由】

高天原勢力（邪馬台国）がなぜ東遷するようになったのか、その理由としては二つ考えられる。

★一つは高天原（邪馬台国）の北部九州勢力は鉄器の使用による農業生産力の発達から人口が急激に増え、新天地を求めざるを得なかったことと推測する。三世紀後半までとされる弥生時代の遺跡・遺物は、北部中部九州が圧倒的である。質と規模においても、近畿（ましてや奈良県）とは比較にならない。北部九州から新天地の東へ移住するためには、銅鐸祭祈圏の盟主である、大国主の出雲の国を屈服させなければならなかったということである。

★北部九州での人口急増の考古学的な根拠もある。森浩一氏や片岡宏二氏は弥生九州の人口増加について述べている。「**弥生中期および後期における墓に葬られた人の数あるいは墓を営む人の数は、北部九州と近畿地方とでは格段の差があるという印象を、各地の発掘状況から、弥生中期～後期に限っていえば私は強く受けている。つまりこの時期に限って言えば人口の圧倒的に集中しているのは北部九州といってよいだろう。**」(『図説・日本の古代4』森浩一 1990 中央公論社)

「**井原ヤリミゾ遺跡も那珂・比恵遺跡 須玖遺跡も弥生後期まで大発展する。・・夜須町（現筑前町）のヒルハタ・谷頭遺跡では後期～古墳時代初頭まで 60 軒の住居跡などが発掘されるなど、大変な規模の遺跡で・・・、遺構分布をみるとどれほど密度濃く生活していたかがわかる。平塚川添遺跡も含め、東側の小田・平塚遺跡は、後期から古墳時代前期初頭までたった 2.45ha の中で 213 軒の住居跡 167 棟の掘立柱が見つかった。この密集度が台地全体に広がっていたとすると、それ恐ろしい数の集落になる。時代別に比較すると下るほどその数を増し、古墳時代初頭で突然消えてしまう。このことはここだけの現象でなく、吉野ヶ里などの佐賀平野でも突然消えてしまう。」**

(『邪馬台国論争の新視点』片岡宏二 2011 雄山閣)

★二つ目の理由としては、315 年ごろの高句麗による楽浪郡と帯方郡の滅亡であると考えられる。魏晋王朝による東夷諸国の冊封体制が消滅して、朝鮮半島の馬韓や辰韓では自立を促されることになった。そして、馬韓や辰韓は統合されて百済や新羅が建国されることになる。倭人のクニグニも、統合へと向かったと考えられるのである。

★東遷の年代としては、卑弥呼・トヨから 2～3 世代後で、かつ百済や新羅の建国より後、つまり**4 世紀中ごろと推測する。**

(7) 付録≪神武＝崇神説について≫

この説は筆者が考えたことであるが昔から存在しており、自信を持つことができている。

①二代綏靖から開化までの欠史八代は非実在

★全てあり得ない父子相続であり、事績がまったく無い。(欠史八代)

★和風諡号のほとんどが後世的であること。

★欠史八代天皇陵とされるものは、古墳とは疑わしいものや崇神陵より新しい前方後円墳である。

★古語拾遺でも、神武東征の次は崇神・垂仁の記事であり、欠史八代天皇に関する記事はない。

★埼玉県稲荷山古墳の鉄剣銘文には「意富比埜」からの系譜が刻まれている。「意富比埜＝大彦命」は 8 代孝元天皇の皇子とされるが、銘文には孝元天皇の記載がない。「意富比埜＝大彦命」は系譜のトップすなわち始祖であり、崇神時代人物である。

②神武＝崇神の根拠

i) 二人の始祖王

《日本書紀》

★神武天皇を「始馭天下之天皇」と記す。第十代崇神天皇も「御肇國天皇」と記す。

《古事記》崇神天皇のみ「謂所知初國之御眞木天皇」記す。

つまり、神武も崇神も初代天皇であることになる。

ii) 神武と崇神の後継者争いの類似

★神武は東征以前に、隼人族の娘である吾平津媛との間に生まれた手研耳命がいたことになっている。手研耳命は東征後に皇后との間に生まれた二人の皇子を殺そうと謀ったため、逆に殺される。一方、崇神天皇の時代には武埴安の乱が記されている。武埴安の地盤は隼人の居住地の南山城、妻も隼人系の吾田媛で、やはり隼人系の皇子の叛乱です。どちらかを元に、もう一方を創作したものとする。

iii) 崇神天皇時代の事績

★崇神時代の四道将軍の派遣

神武即位から九代後に「四道将軍の派遣」や東国での「毛野氏の成立」がなされなかったことは考えられない。また、毛野氏の祖の豊城入彦の母（崇神の妃の一人）は紀伊の荒河戸畔の娘で、神武東征の紀伊の名草戸畔と類似する。

★宮殿で祀られていた天照大神と大和・大國魂を宮殿から外に出しそれぞれ別々に祀ったこと。

宮殿で祀り始めたのも、宮殿外に出されたのも同じ神武＝崇神天皇時代と考えます。

iv) 近畿地方の式内社の由緒書きも神武＝崇神を示唆

★高槻市の溝杭神社（主神は神武天皇の皇后であった媛蹈鞬五十鈴媛命）

★木津川市加茂町の岡田鴨神社（主神は神武東征のときの八咫鳥＝建角身命）

どちらの神社も、創建は神武時代ではなく崇神天皇の世となっている。

《奈良県の式内社の検討》（『式内社調査報告（奈良県）』 皇学館大学出版部編 より）

*奈良県の 216 社のうち、崇神・垂仁時代に創建されたとするものが 17 社存在することがわかった。それらは崇神時代に創建でありながら、全て溝杭神社と同様に祭神は神武天皇時代やそれ以前の神々なのである。欠史八代に創建されたとする神社は全く存在しないこともわかった。

v) 考古学からもヤマトの倭王権成立は崇神天皇時代

★箸墓や崇神陵などの「大和・柳本・纏向古墳群」の出現する時代がヤマト王権成立の時期と考えて間違いない。天皇陵の考古学からは崇神天皇が実在した最初の天皇と考えられる。

※以上の多くの根拠より、神武＝崇神である可能性はきわめて高いと考える。九州からの東征を神武紀として、即位後の事績を崇神紀として記したと考えられるのである。

【終わりに】今や歴史学者のなかでは「天皇家の先祖は九州」卑弥呼＝天照大神・「天火明＝饒速日」・「饒速日がヤマトと名付けた」を語ることはタブーになっているようである。ヤマト中心史観には何かの力がはたらいているようである。天皇制国家に関わることは述べないことになっているのであろう。